



高橋 吾紋 (たかはし あもん) 慶應義塾横浜初等部 5年生

作品名：はたして世から猫は消えたのか

図 書：世界から猫が消えたなら

ただ生きることより、どう生きるのが大切。それは、人によって、夢や目標をもって生きることであったり、家族や兄弟の中でお互いに思いやりを持ち、愛し、仲良く暮らしていくことであったり、好きな仕事に一生懸命励むことだったりする。

この話は、猫と一緒に住んでいる主人公が、突然医者に「脳腫瘍グレード4・余命数週間～数ヶ月。」と診断され、その日に悪魔と出会うというところからはじまる。なぜかこわくない悪魔と主人公のやりとりが面白く読み進めるのに何日もかからなかった。最後のシーンを読んだ時、まるで挿絵があるかのように情景が頭に浮んだ。そのとてもきれいな景色をもう一度見たいと思い、すぐに二度目の読書に入った。

病院から戻ると、部屋に突然いた主人公と全く同じ姿形の人、着ているのは派手なアロハシャツ。なんとそれが悪魔だった。主人公は、悪魔をアロハと呼ぶ。アロハは主人公をすぐあの世へ連れて行くために来たのではなく、世界から何か一つ消せば、一日生きのびられるという交渉のような話をしに来ていた。何か一つずつ消す？ ぼくなら何だろう。生きる為に何を消すだろう。

アロハが来たのが月曜日。火曜日に主人公はまず電話を消す。次の日の水曜日は映画を消しません？とアロハに聞かれていた。結局、水曜日には映画、木曜日には時計を消した。金曜日にアロハが提案した消すものは「猫」。

主人公は、最愛のお母さんを病気で亡くす。その直前に少し関係のギクシャクしていたお父さんとお母さん、猫と一緒に海の見える温泉にいった。お母さんの最後の願いだった。宿の外には広大な海。海岸線の向こうから朝日が昇りはじめ、海面をキラキラと照らしている。家族と猫はその朝の砂浜で写真を撮った。その後、お母さんになついていた猫を引き取りずっと一緒に暮らしていた主人公は猫とお母さんとの日々を思い出さずずっと考えていた。その最中にアロハの言った「猫を消す」はあまりにも残酷だと思う。「それだけはやめてくれ！！。」と叫ぶ主人公。猫と自分の命…。しばらく悩み続けた主人公はきっぱり決断する。「消しません。ただ生きることよりどう生きるのが大切。」と。

僕は、この主人公の「僕」とよく似ている。泣き虫なところ、猫が好きなところ、お母さんが大好きなところ。そしてもう一つ、先のことをよく考えないところ。主人公は、電話、自分が好きだった映画、お父さんが時計屋でいつも修理をしていて、とても身近だった時計、今の自分に特になくはない存在の猫を消す、と言われやっと自分がどう生きるかに気付く。はじめて生きる意味がわかる。

僕が主人公の立場で、もし何か消すとしたら。勉強、テスト、試験など、消したいものは無数にある。でも考えてみれば勉強は、将来役に立つからやるものだ。テストや試験だって、そういうものがあるから勉強する気にもなる。だからやはり消すものは何もないと思う。主人公はどうしてお父さんと仲が悪くなってしまったのか。なんとなく、こじれていった関係が決定的に悪くなったのはお母さんが亡くなる時、お父さんはベッドサイドで見守ることもせず時計の修理をしていたからだ。お母さんは「それがお父さんの愛情の形なのよ。」と笑っていた。最後になりやっとその意味がわかった主人公はお父さんに手紙を書き、手渡しをする決心をした。猫のこれからをたのむこと、口をきいていなかった今までを申し訳なかったという内容で。死ぬことを選んだ主人公が死ぬ前にお父さんと仲直りが出来ていればいいと心から思った。自転車の前カゴに猫を乗せて、お父さんのいる隣町へはじめて走っていく主人公。何度読んでもこのシーンが僕は大好きだ。